

【サンプル】私が後輩のセフレに沼って別れるまでのお話。

1

四月になってまず行われるのが、サークル勧誘だった。

どこの団体も、入学ガイダンス直後の新入生の行く手を阻むように立ち回っていて、愛想とビラを振り撒く。一週間そうやって、新規メンバーを獲得するチャンスをもものにしていく。

私も所属するボランティア部のビラを手当たり次第に配りまくって、足を止めた人を、後ろの長机で待機しているメンバーへ誘導した。ほとんど流れ作業だ。仮入部の署名が並ぶこの名簿の中で、一体何人が新歓に来てくれるのかわからない。

最初はちゃんとした活動をしていたサークルだったのに、代表が代わった一年の後期から毎週飲み会のある飲みサーと化してしまった。それは構わないのだけど、ボランティア部ですなんて、胸を張って言っているものかいつも迷う。

五百枚刷ったピラを配り終えたその週の金曜日、私たち三年が主体となった新歓で、そこに彼がいた。

髪は寝癖なのか、ファッションの一部なのかとどこどこ跳ねていて、インテリ臭の漂うシルバーの細いフレームのメガネで、物静かにテーブルの隅に座る彼は一目で「なんでこんな騒がしいこんなところに？」というような、明らかに場違いな雰囲気醸し出していた。

サークルの中身をよく知らずに、間違えて来てしまったのかもしれない。

彼の周りには避けたように人がいなくて、私はおせっかい丸出しの酔っ払っ

たテンションで話しかけた。

「飲み物足りてる？ お酒、注文しようか？」

「……未成年なので、飲めません」

一瞬、こちらを見てからすぐに視線をそらされる。

こんな場所で、ここまであつさりした対応をされるのは初めてかもしれない。

「えー、でもみんなそういうのわかってて飲んでるよ、ほら」

視線の先には、ぐだぐだに酔っ払ったサークルの面々がいる。

家づくつろぐみたいに足を崩したり寝転んだり、ワンチャン狙って異性に甘えに行ったり。時間が経てばこんなものだ。二時間前まで綺麗に並んで座っていた人達とは思えない。

「酒の力を借りてってわけではないけど、せっかく来たんだからさ、少し話せるようになったら嬉しいな」

「……わかりました」

彼は素直に頷くと、店員を呼んでビールを注文し、私も追加で同じものを頼んだ。

お酒が来るまで、改めてお互いに自己紹介をする。「フカヤ ユウマ」と名乗った彼は私と同じ学部の一年で、県外からやってきたという。

「どうしてこのサークルに入ろうと思ったの？」

「大学生って、どういうものかと思って」

「んん？」

「一番最初に、ビラ手渡されたところに来ました」

外見に似合わず、向こう見ずというか、なかなかアグレッシブなことをするな……。そう思ったけど、きっかけはどんなことでも、友人知人が増えるのは単純に嬉しい。

「そっか。どうでしょう。ボランティア活動という大義名分を掲げたただの飲

みサーですが、今後よろしくするというのは」

「考えておきます」

わざと芝居がかった口調で言ってみても、ちょうどいいタイミングでやって来たビールジョッキを掲げて乾杯するときも、ユウマくんの表情はあまり変わらなかった。

極度の人見知りなんだろうか。でも人見知りだったら、そもそもサークルには入らない気がする。

「——わ、君、美人だね」

飲酒初体験という彼がジョッキに口をつけたとき、思わず声が出た。

「は？」

「まつ毛長くて鼻筋整ってて、前髪とメガネで隠れてるからわかんなかったけど、目を伏せたときとかすごく綺麗。ねえ、中性的って言われない？」

「……………」

みるみるうちにユウマくんの眉間に深い皺が寄って睨まれる。初めてまともに見せる感情のこもった表情がこれで、一気に酔いが覚めた。

「ごめん、私、酔っ払ってて、失言多いってよく言われる……」

「そうですね、顔のこと言われるのはあんまり嬉しくないのです」

「うう、ごめん……」

気まずい沈黙が流れる。

これ以上、隣にいたら余計嫌われるかもしれない。

仲良くなるのは諦めて、トイレを言い訳に離れようとした。だけど、彼も持っていたジョッキが私の前に差し出される。

「これ、おいしくないですね」

今度は拗ねたような子供みたいな顔をして、「あげます」と、押しつけられる。

「え、……わー、いいの？ もらっちゃうよ」

「もつと飲みやすいの、ないんですか」

彼なりに気を遣ってくれたのだろうか。本来そういうのが私の役目なのに申し訳ないことをした。

定番の甘いお酒をいくつか勧めるとそれは口に合ったのか、どんどんグラスが空になっていく。

「甘いのが好きなの？」

「いや、べつに」

会話が弾まない。

なんだかおとなしい野良猫を保護した気分だ。なまじ顔がいいぶん、ずっと見ていられる。

「暇じゃない？」

「人間観察してるんで、特に」

「なにそれ」

「……あの二人は付き合ってるんだとか、あの人がサークルの中心なんだとか」

「へえ、分析してるんだ」

「初対面の人と仲良くするっていうのが苦手なので、ある程度、情報入れとかないと、失礼な態度取りそうで」

「まじめー。ああ、でも、こうやって俯瞰で見たことないから新鮮。はたから見たら誰が付き合ってるとかいい感じとか、わかりやすいね」

壁に背中をくっつけて、ほぼ貸切のフロアを見渡す。

集団の中でも一際目立つ派手な外見の男女が目についた。

男の方は私の高校時代の同級生で、半年前まで付き合っていた元彼で、彼女の方は学部の後輩だった。あの二人はまだ付き合ってるんだな……。

あの子と付き合うようになって、元彼は外見も中身も随分変わってしまった。高校の頃はもう少し、おとなしかった気がする。

「で、誰彼構わず話しかけてくるアナタは、特にこの中では付き合ってる人がいないと」

「おー、正解」

あっさりと言い当てられてへらへらと笑ってみる。

付き合っている人どころか、特別仲が良い人もいない。みんな、名前と学年と学部を知っているような知り合いだけ。

この場でも挨拶や適当な近況を軽く話したら終わり。サークル活動以外での交流はない。

高校の頃から付き合っていた人と同じ大学、同じサークルに入って、振られてもしぶとく居続けているのは一人になりたくないから。

かと言って今から他のサークルに入ったり、このサークルで誰かと深い仲になったりするのは厳しい。

もうみんな、それぞれ気の合う人を見つけている。

このサークル内での私は「広く浅く付き合うタイプの人」という立ち位置だった。誰かに呼ばれたら行くし、話題が尽きたと思ったらそっと離れる。そんな感じ。

私はこの無愛想な新入生のユウマくと一緒に壁にもたれながら、お酒をちびちびと飲んだ。お互いのことは自己紹介以外何も話さず、ただ目の前にいるサークルのメンバーを私が紹介していく。

彼は誰に対しても特に感想を言うこともなく「へえ」と「そうなんですね」を繰り返して相槌を打っただけだった。

そうしてラストオーダーの時間になると、トイレに立ったきり戻って来なくなつた。

「人間観察は終わったのかな」と思いながら、連絡先を聞かなかつたことを少し後悔した。

彼とは仲良くなれそうな気がした。

失礼な態度をとるからと、あまり自分のことは話さなかったし、私のことも聞いてこなかったけど、そこが良かった。

初対面なのに、変に取り繕ってむやみに距離を縮めてこようとする人よりは、ずっと信頼できる気がした。……それは私か。

お開きの時間になって今日の会費を払おうとしたら、幹事であるはずの元彼が見えない。というか何やらトイレのほうが騒がしい。また誰か、飲み過ぎて潰れたりでもしたんだろう。

野次馬根性を丸出しにして用を足すついでに見に行くと、数人の男達がしゃがみ込んだ一人を取り囲むように騒いでいた。一瞬、ケンカかと思ったけど聞こえてくる話の内容からすると、しゃがんでいる男が酔い潰れたらしい。

「まさか」と思って、すれ違い様に首だけ動かして見る。……「まさか」だった。

「ちょ、大丈夫？」

慌てて男達の輪の中に入る。酔い潰れていたのは、さっきまで私と一緒に
なつて壁にもたれていた綺麗な顔の新生生だった。

「ごめん、飲み過ぎたんだよね。大丈夫？ 吐いた？」

彼の目の前に一緒になつてしゃがんで、うずくまっている背中をさする。

「お前か」

全てを察したのか私の背後に立っていたブチギレ寸前の元彼が声を荒げた。
いや、もう手遅れか。

振り向いて見上げると、目を吊り上げた元彼が私を見下ろしている。

「無理やり飲ませるなつて言つてんだらうが」

「ごめん、ほんと、私、送つてく」

「当たり前だ、責任とれよ」

元彼はそう言うと、新生生の体調を気遣うように一言二言、言葉をかけて座

敷のほうへ行ってしまった。彼を追いかけないように残りの男達もゾロゾロとはけていく。

取り残された私たちは遠くで飲み会を締める元彼の声を聞きながら、トイレの通路にしゃがみ込んでいた。

……あ、会費払ってない。まあ後でいいか。

問題は目の前にいるユウマくんだ。体育座りのような格好のまま腕に顔を埋めて動けないでいる。

「家、近い？ タクシー呼ぼうか」

「……………」

ふるふると無言で首を振られる。どっちの意味なんだろう。家が近くないのか。タクシーは呼ばなくていいのか。聞き方を間違えた。

「大丈夫？ 本当にごめんね」

「……大丈夫です。あなたのせいじゃないから……」

消え入りそうな声が返ってきて、顔が上がった。

トイレで吐いたのか、顔が真っ赤で目元に涙が溜まっている。

「ちゃんと責任持って送っていくからね」

さつきまで誰も寄せ付けない孤高な雰囲気だった彼は、縮こまって小動物みたいになっている。

「……すみません」

謝りながら涙目の目尻を下げて小さく笑う顔を見て、こういうときに不謹慎だけど、やっぱり綺麗な顔をしているなと思ってしまった。

動けるようになった彼と座敷に戻ると、三十人くらいいたメンバーはすっかりいなくなっていて、食べ散らかした料理の皿がテーブルに、私たちのバッグが壁に沿うように取り残されていた。

バッグの中に入れっぱなしにしていたスマホを取り出す。

元彼、もといサークルの幹事からは、二次会の場所と会費を立て替えたから後で払って欲しいというメッセージが来ていた。既読だけつけてスマホをしま
う。

「さて、出ようか」

まだ気分の悪そうな彼の手を引いて、店を出る。

四月の夜は天気も気温も不安定で、今日は少し肌寒い。だけど酔い覚ましにはちょうどいいかもしれない。

手を離して隣に並んだユウマくんは、百八十センチは超えているのではない
かと思うほど身長が高かった。体調の良い彼に気を遣ってゆっくり歩いて
みたけど、足の長さが釣り合わずに彼のほうが私よりも先へ行ってしま
う。

引っ越してきたばかりで土地勘がないという彼から住所を聞き出して、学
生のアパートへ向かった。

さっきの居酒屋から二十分歩いて、自分の家とは正反対に位置している住宅

街を歩く。迷わずに目的地に着けたのは、ユウマクンのアパートが元彼のアパートの裏だったから。同じような外観ということは、きっと大家と一緒にだろう。

アパートの一階部分の中廊下を歩き、五部屋あるうちのちようどの真ん中で彼の足が止まった。無言で鍵を取りだして玄関を開けたかと思うと、異常なくらいのスピードで靴を脱ぎだし玄関を入れてすぐ左にある個室へ入っていた。間髪入れずに嗚咽のような声が聞こえてくる。

「ちよっと、大丈夫!？」

家には送り届けたしこのまま帰ってもよかったのだけど、こんな声を聞かされたら放っておくわけにはいかない。

「お邪魔します」と小さく言って、彼が閉じこもっている個室の前に立つ。
「……ねえ、大丈夫？」

ドアをかるく鳴らし、応答を待つ。それどころじゃないのか返事がない。

ここに来る直前、自販機があつたのを思い出した。水か何かを買ってきたほうがいいかもしれない。

いったん彼の家を出て、赤色の自販機から水とスポーツドリンクを買って戻る。往復五分もかからなかったけど、彼はまだ個室にこもったままだった。物音一つしないのが余計に怖い。

「入るよ」

返答を待たずに入ると、中はユニットバスになっていた。シャワーカーテンで仕切られたバスタブの手前にトイレがあつて、その便器に顔を突っ込んでいるかと思うくらいぐったりとうずくまる彼がいた。

「まだ吐きそう？」

「んん……」

「体、起こせそうだったら、水持ってきたからうがいして」

柔らかいペットボトルをパキパキと開けて手渡す。青白い顔の彼はゆっくり

と受け取ると、口をゆすいでトイレに吐いた。

それからふらふらと個室から出て、持っていた水のペットボトルごと力尽きたようにベッドになだれこむ。

つい二週間前に引っ越したばかりという部屋には、グレーのパイプ脚のベッドと小さなメラミン製の黒いテーブル、その上にノートパソコンが置かれただけだった。

「スポドリ、買ってきたからここ置いとくよ」

そう言ってテーブルの上に置く。首だけをぐるりと動かした彼と目が合った。そろそろ帰るねと言いかけたところで、彼がのっそりと起き上がった。

「……風呂、入ってきます」

「え、待って、死んじゃう死んじゃう」

「このままのほうがいい」

吐くまで酔っ払っているのに、何を考えているんだろうか。

慌てて止める私を無視してベッドから降りた彼は、眼鏡をテーブルの上に投げたかと思うと、そのまま私の背後にあるクローゼットを開けて、服やタオルを取り出しユニットバスのほうへいつてしまった。

しばらくして本当にシャワーの音が聞こえてくる。

完全に帰るタイミングを逃してしまった。だってこのまま彼を放って帰って、もし私がない間に意識を失いでもしたら後味が悪い。

せめてシャワーから出た彼が眠るまで見届けないと……。

勝手にベッドに腰を掛けて、スマホを取り出す。元彼からメッセージがまた入っていた。

「ごめん、さっきは強く言いすぎた」、「新入生のことは送って行ったのか」、「二次会には来ないのか」、「遅れて入りづらいなら迎えに行つてやろうか」——。一分間隔で立て続けに送られてきた文章にため息をついて、「二次会には行かない」とだけ返した。

友達に戻りたいと振ってきたくせに、こうやって何度もメッセージを送ってきたり、迎えに来ようとしたり、今の彼女に誤解されるようなことはしないでほしい。

それともこれが元彼なりの友人に対する優しさなんだろうか。だとしたら本当にはいかない。もう友人以下でいい。

動画を見ながら適当に時間をつぶしていると、唐突にドアの開く音とともにふわりとフローラル系の甘い香りが漂ってきてグレーのスウェット姿のユウマくんが出てきた。

私の顔を見るなり、驚いたように目を見開いている。勝手に腰を掛けているのがまずかったのかと思って慌ててベッドから立ち上がった。

「だ、大丈夫……?」

「はい、なんとか。すみません、ご迷惑をおかけしました」

さつきよりはいくらか顔色が良くなっている彼は、定型文のような謝罪をして私の前を通り過ぎると、もぞもぞとベッドに潜り込んだ。

「あ、じゃあ私、帰るね」

「家近いんですか？」

……いや、全く。ここからなら歩いて三十分以上はかかる。

口籠る私に「最近、この辺に不審者が出たみたいですよ」と、彼はさらに不安になる情報を付け加えてきた。

「……ええ、なにそれ……」

「嫌じゃなければどうぞ」

ぺらりと布団をめくって、彼がベッドから出てきた。

「ユウマ君はどうするの」

「床で寝ます」

あっさりと言って、本当に何もかけずにベッド脇の床にごろんと落ちた。

エアコンもつけないまま寝るなんて、体も痛めるだろうし絶対に風邪を引く。

「ダメだよ、じゃあ半分、三分の一でいいからベッド貸してくれる？」

言いながら手を引つ張って彼をベッドに戻す。渋々と壁側に寄つたのを確認して「……お邪魔します」と、私も彼の隣に並んで寝転んだ。

自分だって酔いが回っているはずなのに、それが覚めるくらい緊張する。

異性と同じ布団に入るのは半年ぶりだからか、それとも寝返りを打てばすぐの距離に見慣れない綺麗な顔があるからだろうか。

衣擦れの音ひとつでも、耳に入ると心拍が跳ね上がる。

変な先輩だと思われるかもしれない。

酔っ払うまで酒を飲ませて家までついてきて、挙げ句、ベッドを半分取るなんて迷惑行為だ。せめて彼が狭くないように、体を横向きにして足を布団からはみ出させる。

「寒くないですか？」

「はい!？」

突然話しかけられて声が裏返ってしまった。

首を回して振り向くと、彼も私のほうへ体を横向きにしてを自分の腕を枕にしていた。

ふ、と鼻で笑われたあと、また「寒くないですか？」と訊ねられた。

「うん、大丈夫、ありがとう」

「いや、足はみ出てんじゃん。もうちょっとこっち来ていいですよ」

体を起こした彼に、タメ口と敬語が混ざった調子で返される。少しは仲良くなれたのだろうか。だとしたら嬉しい。お礼を言って、彼が空けてくれたスペースに体をずらす。

眼鏡を外して、濡れたままの前髪がオールバックのように持ち上げられていた彼は、本当に綺麗な顔をしていた。ハーフを思わせる彫りの深いはつきりと

した端正な顔立ちゆえに、真顔だと厳しめの印象なのに、笑えば目尻が下がって人なつくく優しそうに見える。モデルだと言われたら誰もが頷いてしまうくらいだ。

思わず、その伏せたまぶたに触れてしまった。

「……なに？」

彼が薄目を開けて声を出した。怒っている風ではなく、子供のいたずらをたしなめるような優しい声だった。

「あ、ごめん。……そういえば体調はどう？」

「全部吐いたから、もう大丈夫ですよ」

そう言って薄く笑って、また目をつぶる。

知り合って間もない私にこんな無防備な姿を見せて、居酒屋では「失礼な態度を取るから」と一線を引いていた彼とは大違いだ。優しい人なんだとわかる。

もう少し話したい。だけど吐いたばかりの彼にこれ以上付き合わせてしまうのも悪い。

彼は、サークルに入ってくれるかな。また会えるかな。今日限りだったら、やだな。

しばらくじっと見つめてみても、彼は目を開けてこちらを見なかった。寝たのだろう。

諦めて、彼に背を向けるように寝返りを打つ。

「あっ、ごめん！」

「……いった」

距離感を間違えて、彼のあごに頭をぶつけてしまった。さらに背中を壁にくっつけている彼を無理やりおしつぶような形をとってしまった、腰あたりに違和感を覚える。——これは……。

「生理現象？」

そう言ったのはユウマくんのほうだった。

そろそろと寝返りを打った体をまた彼へ向き直す。ユウマくんは少し申し訳なさそうに眉を下げて、薄ら笑いを浮かべながら私を見ていた。

一体いつからだだったんだろう。好意すら抱く以前の会ったばかりの女に、勃つものなのか。

経験人数が元彼ひとりだけだから、男の人の体には詳しくない。

「へ、え、男の人って大変だね」

裏返しそうになる声をごまかしつつ、なんでもないよう言いながら視線を布団の中へ下げて、彼のスウェットの膨らみを撫でた。

「……っ、なんですか」

それまで飄々と余裕そうにしていた彼の声が震えた。少し動揺が混ざっている。

スウェット越しに手を動かしながら顔を上げると、彼は困惑した目つきで私

を見ていた。

まあ、そうか。どう見たってこれは立派なセクハラで、アルハラの上にさらに罪を重ねる私は、きつとこれから修復しようのないくらい彼に嫌われるかもしれない。だけど、止まらなかった。

これつきりでもう会えないなら、どうにかして彼の内側を見てみたかった。パーソナルスペースのさらに内側に入ってみたかった。

「……今日のお詫び」

スウェットのゴムに指を引っかけて今度は下着越しに撫でると、さっきよりも高い温度が指にまとわりつく。さっきシャワーを浴びたばかりなのに、先走り濡れた生地の一部が段々とぬめり出してきた。

「……………っ」

息を呑む彼は抵抗しなかったし、私も煽るようなことは言わなかった。それをいいことにどんだん指の動きを早める。

触れる部分に熱がこもって、ますます湿り気を帯びていく。

「ねえ、下、全部脱いでよ。やりづらい」

「……酔ってるんですか」

「うん」

全部、酔っ払ってるからで済ませられるならそうする。

抵抗もしないけど協力もしない彼に少しいらだって、結局自分の手でス

ウェットもパンツも下ろした。

服に引っかかりながら、ぶるんと飛び出てきたペニスと久しぶりに嗅ぐ雄の匂いに頭がくらくらする。本能なのか口の中に涎が溢れてきて、自然と呼吸が乱れる。

舌先を伸ばして鈴口から溢れる透明な雫を舐め取ると、彼の腰が振れた。

そのまま裏筋に舌を這わせてから先端を唇で包み込んで、舌を伸ばして亀頭の裏側を舐める。

ソフトクリームを舐め取るように舌を動かすと、太ももの震えが徐々に大きくなった。布団の中に潜った状態なのに、はあはあという彼の呼吸の荒さがすぐ近くで聞こえる。

私が触った直後は困惑していてどうしていいかわからないような態度だったのに、舌と指を動かすだけでその辺の男と変わらない。彼の余裕がそぎ落とされていくのがわかる。

馬鹿にしているわけではなくて、彼も普通の男の人なんだなってほっとした。

「あ、……んっ…む、んんっ」

口の中全体で頬張るようにさらに深く頭を沈める。その瞬間、呻くような彼の声が聞こえてますます嬉しくなる。

よかった、ちゃんと気持ちよくなってきてる……。

自分からこんなに深く啜えたことはないし、そもそもフェラチオ自体得意

じゃないけど、なぜか彼に對してはしてあげたい気持ちが強かった。

「ん、は、……あむ、んっ、……んっ」

音を立てて夢中になりながら頭を動かす。そのうちに彼の大きな手が私の頭に触れた。髪を掬い上げられて撫でるような手つきで優しく動かされて、きゅうつと触られていない下腹部が甘く痺れる。

根元まで深く啞え込んで、パンパンに張り出した亀頭を喉奥にこすりつけるように小刻みに動かすと、彼のため息が長く響いた。……ああ、これ、好きなんだ……。

根元に舌を這わせて、とふとふと溢れてくる先走りを飲み下すように喉奥をすぼめる。

苦しくてえげすきそうになるのに、それが気持ちいいことみたいに錯覚して、頭が痺れて体中が震えてくる。

「んっ、……ふ、……んんっ……」

彼の指が、耳の縁に触れて私の耳孔を塞いだ。遠くの苦しげな息遣いが聞こえなくなった代わりに、怒張をしゃぶる粘着質な音が一層鮮明に鼓膜を震わせる。

もっと奉仕して気持ちいいところを暴きたい。もっともっと知りたいたい。

そう思うのに私の体のほうは彼が欲しくて限界だった。

最後にきゅっと喉奥を締めて、唾液と先走りでぬるぬるに濡れたペニスを解放する。

「……ね、したい。最後までしていい？」

布団から顔を出して、彼のペニスをくちゅくちゅと手でしごきながら反応を待つ。予想通り、顔を背けたままうんともすんとも言わない。私の頭を撫でていた彼の手も、離れてしまった。

嫌だったら力づくでも私を剥がして追い出すだろう。

彼の無言を肯定と受け取った私は、自分の服をベッドの外へ脱ぎ捨てて彼の

上に跨った。

暗がりに慣れた目で彼を見下ろす。精巧なつくりをした顔は少し苦しそうに息を整えていて、目が合ったかと思うと腕で顔を隠してしまった。その瞬間の彼が可愛く思えて、言い様もない愛おしさがこみ上げてくる。

前戯もなにもしていない秘裂に、彼の先端をあてがう。

おちゅ、と水音がして、一度も触られていない箇所が濡れていることに驚いた。自分でも気づかないくらい興奮している。

くちゅくちゅと先端を動かしながら蜜口に馴染ませて、ゆっくりと腰を下ろす。

濡れていても、前戯なしでいきなり挿れたことなんてなかったから、ぴたりと合わさったところを無理やりこじ開けるような抵抗感があった。それを無視して、自重で彼のペニスを膣内へ沈めていく。

「う、ん……っ、……はあっ、は……っ、ああ——、……あはっ、挿入っちゃっ

たね……」

自分からねだるのも、こんなことを言いながら跨がるのも初めてだった。

彼の熱で、お腹の奥までみっちり満たされる。まだ一ミリも動かしていないのに背中がゾクゾクして、膣内がきゆうきゆうと締め付けを繰り返した。

想像以上の快楽に、冗談ではなく腰が抜けるかと思った。

挿入しただけでこんなに気持ちいいなんて知らなかった。動いたら、きつともっと気持ちいい……。

期待で、喉がこくりと鳴る。

硬いままの亀頭から溢れる先走りをも、子宮の一番奥にこすりつけるように体を前後に揺らした。お互いの体液が混ざり合ってくちゆくちゆと粘り気のある音を立てて、快感を拾い上げるたびに太ももの内側が震える。

「んあっ、あ……っ」

彼の太ももに手を突いて喉を仰げ反らせたまま、ぐりゆっ、ぐりゆっ、と自

分の体を揺らすと、気持ちよさで何度も腰の力が抜ける。だけど本能ではもつと気持ちよくなりたくて、狂ったように動くのを止められなかった。

「んんっ、ふ、う……ッ、く、……っん、……ううっ」

下唇を噛んで、漏れ出しそうになる声と息を抑えながら、ばんばんに張り出したカリ首で子宮の奥の気持ちいいところをねつとりと擦り続ける。いやらしい音が鼓膜をふるわせるたびに、頭の芯がとろとろに溶けてきた。

あ、あ……ああ……っ、意味分かんない……、なんでこんな、気持ちいいんだろう……。

「ふ、っ……くう、ううッん……はあっ、は、んん……っ」

静まりかえった深夜の部屋に、押し殺した自分の嬌声とベッドのきしむ音、にちゃにちゃという粘り気のある水音が響く。

彼は、腕で顔を隠したままこっちを見ていない。

それをいいことに、自分が気持ちよくなる箇所を重点的に責めて好き勝手に

動きまくった。擦り続けて充血した膣内が白濁した愛液を吐き出して、繋がった部分を汚していく。

「はッ、うん……、あ、ああっ……あ——……」

こちゅこちゅと小刻みに腰を動かす。肉棒を締め付けるように下腹部に力を入れると、余計にお腹の中が痺れて熱い。初めて、膣内でイキそうになる。

私と同じように下唇を噛んでいる彼は、さつきからずっと腕で顔を隠したままで表情が見えない。

何も考えられなくなった頭で考えて、腰の動きを止めてから彼のスウェットの裾に手を入れてまくり上げた。筋肉も脂肪もない薄い胸板が現れて、そこにある小さな突起に舌を伸ばして吸い付く。

「んあ、っ……ごめんね、私だけ気持ちよくなって」

そう言いながら尖らせた舌を這わせる。もう片方を爪で引っ搔くと、先端が一瞬で硬くなってきた。口に含ませてぢゅゅつと吸い上げてから、歯を立てて

優しくしごきあげる。

彼の固く結んだ口元から、ふっ、ふっ…と苦しげな息が漏れて、顔に乗っていた腕がずるりと落ちた。

顔が見たくて体を起こそうとすると、阻止するように頭ごと抱きかかえられて下から突き上げられる。

「~~~~~っ」

突然の出来事に、ひゅっとな喉が鳴った。

胸が潰れるくらい彼の体の上に上体をべったりとくっけたまま尻をわしづかみされて、がつがつと腰がぶつかる。

「うあっ、んあ…っ、は、…っ、あああっ、ま、って、や、うごかないで…っっ」

彼はずっと無言のまま、ぐちゅぐちゅと乱暴に腰をふりたてた。

年下だから、抵抗しなかったから、どこかで彼を軽んじていた部分があっ

た。

「ひ、あつ、ああつ……ごめ、つ、ごめんなさいッ……、」

怒らせたのだと思って謝っても、彼の動きは止まらなかつた。

自分から動いていたときは調整して加減していくのを我慢してたのに、グズグズに弱くなつた一番奥を何度も硬い先っぽで突かれて押しつぶされて、快楽に腰が跳ね上がる。

だけど頭も腰も両腕で押さえつけられているせいで、投げ出された足でズリズリとシーツを蹴飛ばすしかできなかった。

頭の中がバチバチと白ける。

「——やつ、い、……つく、っ……、あああっ」

舌を伸ばしたまま、謝り続けて彼の胸の上でイッた。お腹の奥が麻痺したように痺れる初めての感覚だった。

だらりと脱力した体を受け止めながら、彼の腕が私の頭や背中を優しくゆっ

くりと撫でる。

はっはっと思を乱して目の焦点が合わない間に、抱っこするように体を持ち上げられて、そのままベッドの上にどさりと落とされた。

「……あ……怒ってる……？」

「ヘンタイ」

私の質問には答えずに、彼は目と口元を歪めて見下すようにそう言った。

さっきまでの顔を隠して、私に好き放題されていた彼とは全く違う雰囲気だ。

「人の体でオナニーしないでください」

抜けてしまった反り勃ったままのペニスが腰をつかんで押し戻される。

「んっ」

反射的に声を漏らすと、私の体を見下ろしていた彼が声をあげて笑った。ゆるゆると腰を動かされながら、彼の手が胸に伸びる。

「女の人の体って、こんなに柔らかいものなんですね」

ふにふにと胸全体を揉みしだかれる。ぎこちないというか遠慮がちというか、ついさつきまで乱暴に腰を振ってきたとは思えないくらい優しい手つきだ。

「……もしかして、触るのはじめて……？」

「うん」

意外だった。この顔だから、セックスはもう高校生のうちに済ませているものだと思っていた。

「そっかあ……ふふ、オメデトウゴザイマス」

「は？ 馬鹿にしたでしょ、今」

言葉はとげとげして無愛想なのに、ふにゆふにゆと動かす手は優しいままだ。胸全体をやわやわと優しく揉まれて、親指の腹ですりすりと胸の先端を撫でられる。

「っ…、ん……」

手や指に意識が集中しているのか、私の中に挿入ったままの彼はなかなか動いてくれない。お腹の奥がもどかしくて、きゆうつと疼く。さつきみたいに激しく動いて欲しい。だけど気づかれたくない。

「……ね、くつついたほうがもっと気持ちいいよ……？」

腕を伸ばしてねだる。

彼は何も言わずに私に覆い被さってきた。

体が密着したのと同時に、ぐりゅつと奥にハマりこんだ肉棒を無意識にしゃぶり喰い締める。

「~~~~~っ」

ぞくぞくと背中が震えて、は…ッと重たい息を吐いた。

重さも体温も気持ちよくて、ずっとこうしていたくなる。

離れていけないように、彼の頭を抱きよせて快楽に没頭する。

「んあっ、あっ……ん、……っ……う、ああっ……」

余裕を無くした彼は私の体を氣遣うこともなく、一心不乱に腰を振りたくつた。

ものみたいに扱われて嬉しいわけがないのに、私はどういふわけか彼の体にしがみついて、子宮の奥をめちゃくちゃにされる快感に震えた。

「っ、ねえ、イキそうなんだけど、どうしたらいい？」

体を起こして、苦しそうな表情をした彼が私の腰をつかんだ。

「んっ、…おなかの、うえに…だして…っ」

そう言った瞬間、さらに手加減無しに腰を打ちつけれる。

「あっ、んんっ、……は、あんっ」

ばちゅばちゅと水面を叩くような音が響いて、苦悶の顔で荒々しく息を吐く彼から流れた汗が、私の胸に飛び散る。

「はあ…っ、はっ、—— ああっ」

「……………うッ……………」

小さい呻き声の後、引き抜かれたペニスがどろどろの白濁液を放って、私のお腹から胸にかけて汚していった。呼吸を乱したまま、ユウマくんが私の横に倒れ込む。

私のほうは、あと少しでまたイケそうだったけどイケなかった。

だけど不満や燻った感じは無く、この飄々とした彼が、私の上で切なそうに顔を歪めていたのがこれ以上にないくらい嬉しくて、どうでもよかった。

「……………」

無言のまま、綺麗な顔立ちがこちらをじっと見つめてくるから、腕を伸ばして頭をくしゃくしゃに撫でてみた。

「……………バカにすんな」

「してないよ」

少しだけ小さくなって、素直に頭を撫でられている彼に笑みがこぼれる。

午前五時を回るかどうかギリギリのあたりで、ようやく空が白み始めてきた。

私に背を向けながら寝ている彼を起こさないように、ゆっくりとベッドから這い出て服を整える。

「――帰るの？」

静まりかえった部屋の中で、いきなり声をかけられて飛び上がった。

いつの間にか起きたのか、彼は眠そうに顔をしかめながら私を見ていた。

「う、うん、外も明るくなってきましたし。お邪魔しました」

アルコールが抜けると昨夜の自分の行動が途端に恥ずかしくなってきた、彼の顔をまともに見られない。

逃げるようにバッグを取って背中を向けると、その肩紐を引っ張られた。

「待って、送っていく」

彼がベッドから上半身をはみ出させて、テーブルの上から眼鏡を取った。

「え、あ、ありがとう、優しいね」

「べつに。このまま一人で帰してやばい奴につきまとわれて刺されて、最後に会ったのが俺だからって警察に事情聴取されるのが嫌なだけ」

「自分の保身か」

私の言葉に、ふと口元だけ歪めて彼が笑った。吹っ切れたのか、彼の言葉から敬語がどんどん抜けている。だけど嫌な感じはなく、なついてくれた気がしてむしろ嬉しかった。

早朝の澄んだ空気が充満した住宅街には、私達以外にも若い大学生らしき人たちが数人歩いていた。きつとカラオケあたりでオールした帰りなんだろう。最近はしなくなっただけ、去年までは私もしょっちゅうやっていた。

長身の体をまっすぐ伸ばして歩く彼の横を、追いかけるように早足で歩く。

「今さらなんだけど、彼女いたらごめんね」

「いないよ、そんなの」

そっけなく言われたけど、内心、嬉しさと安堵で感情がぐちゃぐちゃだった。

よかった、彼女いないんだ……。

一度寝たから気が大きくなってしまっていた。もしかしたら、このまま付き合えるのではないかと淡い期待をしてしまうくらい。だけどその期待は次の一言でもものの見事に粉碎されてしまった。

「俺、あんまり人と深く付き合ったりとか好きじゃないし、ていうか、たぶんできないし」

「……え……」

あ、これは、きっと牽制されたんだろう……。

舞い上がっていたところを、鈍器で頭を殴られたくらいの衝撃が来て顔が引

きつる。

「へえ、そうなんだ……。じゃあ昨日みたいにセックスだけとか、そういうのがいいんだろうね。お互いが負担にならない感じの」

「ああ、うん、そうですね」

自分で誘導した言葉なのに適当な感じであっさりと同意されて、勝手に傷つく。

まあ、昨日会ったばかりでセックスして、それで好きになってしまう私のほうがおかしい、のだろう。というか、ちよろすぎる……。うわ、今さら、恥ずかしくなってきた……。

「ね、ねえ、そういえば、うちのサークルどうだった？」

黙って歩いていれば泣きそうだったから、不自然なくらい無理やり話題を変えて場を持たせる。

それまでまっすぐ前を向いていた彼が急に横を向いた。ばちっと視線が合

う。逸らすタイミングを逃して、緊張しながら彼の顔を見つめた。

「酒癖の悪い痴女がいるやばいサークルだっていうのは理解しました」

「ええ、ひどい、なにそれ」

笑いながら彼の背中を小突いた。付き合ったりできないと言われて傷ついた後に、こんな軽口を叩かれて喜んでいる自分がいる。

「これからよろしく願います、先輩」

「うん、サークル以外でもなにか講義とかで困ったことがあったらいつでも言いなよ。同じ学部だし」

「極力頼らないように頑張ります」

彼は最後の最後で私が喜ぶような言葉を言わない。そこはさっきみたいにな「よろしく願います」って言って欲しかったのに。

彼の歩幅に合わせたからか、思っていた以上に早く私のアパートに着いた。

もう少し話したかったし、連絡先もまだ聞いていないから知りたかった。だけれどどこまで踏み込んでいいのかわからない。

「へえ、道路挟んですぐ大学っていいですね、遅刻しなさそう」

「いいでしょ。結構、人気の物件で空いてもすぐ埋まっちゃうんだって」

部屋に、招き入れていいのだろうか。だけでもなすほどのお菓子や飲み物があるわけでもない。しかもまだ早朝だ。

自分の部屋の玄関先でどう切り出そうか悩んでいると、突然、彼が思い出したように言った。

「あ、そうだ、連絡先」

「え？」

「頼れって言ったのはそっちなのに、連絡先も知らないでどうやって頼ればいいんですか」

「あつ、そうか」

ドキドキしながらスマホを差し出す。連絡先を交換している間、緊張して手が震えっぱなしだった。

メッセージアプリに彼のアイコンが追加されて、うつむきながら気づかれないうように頬を緩ませた。

「じゃあね、先輩。バイバイ」

「う、うん、またね！ 送ってくれてありがとう！」

スタスタと軽い足取りで彼が道路を渡っていく。その後ろ姿が見えなくなるまで、私はドアの前で立ったままだった。もちろん、彼は振り向かない。

普段は飲みサーでも、四月から六月にかけてのサークルはなにげに忙しい。周りに小、中、高校が並んでいるという立地のため、四月は近所の小中学校の保護者に混ざって登下校指導をする。

五、六月はボランティア部の中学生と一緒に放課後、通学路のゴミ拾いをしたりとそれなりに真面目なサークルらしいことをした。

講義とレポートで忙しかったり、バイトを始めたたり単にめんどくさかったりで、ぼちぼちと減っていくサークルの新メンバーの中、ユウマくんは律儀にどのボランティアにも毎回出ていた。

毎週金曜日に行われる「お疲れ様会」というただの飲み会にも、ソフトドリンクで参加してくれる。

そういう素直さがいいのだろう。彼はあつという間に誰からも可愛がられるようになつて、あつさりとサークル内での居場所を確保していた。

飲み会ではぼーつとしていているようでさらつと核心を突くようなことを言ったり、歳上に対して敬語を忘れてたりしても、長身で顔がいい分、何を言っても許されてしまうお得意キャラになっている。

そんなユウマくんは飲み会が中盤を過ぎると、必ず私のところへやってきた。

「ステルス先輩、避難させて」

「誰がステルスよ」

酒の入った上級生の無茶ぶりを適当にあしらっているユウマくんを眺めながら、相変わらず座敷の隅に座ってひとり飲んでみると、目が合つて寄つてきた。

すとなんと隣に座つて、数秒、お互いに何も言わない。

「ねえ、今日も行っていい？」

初めて会ったときのように体育座りで周りを見渡しているユウマくんが、隣の私ですら聞こえないくらいの小さな声で訊ねてきた。

「……だめって言ってもついてくるくせに」

「うん」

何も面白いことは言っていないのに、立てた両膝の中に顔を突っ込んで肩をふるわせながら、くつくつと笑う。誰かお酒でも盛ったのだろうか。やけに機嫌がいい。

会話らしい会話をろくにせず、隣に座って五分も経っていない。

それなのに、私と違って座敷の隅にいても存在感を消せない彼は、あつけない二年の女の子達に見つかって囲まれてしまった。

きやあきやあとテンションの高い彼女たちの話を、彼が冗談めかして「うるさい、酒臭い、寄るな」と言いながら捌く。それにめげずに絡んでいく女子

達。まるでアイドルとファンだ。

どれだけ飲んでも、あの集団の中では彼女たちと同じテンションは出せない。かといってこの光景を黙って見ていられるほど心が広くない。

居心地が悪くなった私はトイレに行くふりをして席を立った。

他のサークルも飲み会をしているらしい。仕切られた襖の向こうで騒がしい声が響いている。

トイレへ続く通路を歩いていると、前から元彼がやってきた。目が合って片手を上げながら近づいてくる。

「なに、具合悪いの？」

「んー、全然、普通にトイレ」

「だよな、お前、酒強いもんな」

「そうだね。ていうか、あんたの彼女、一年生にちよっかい出してよ」

「ん？ ああ、ユウマだろ。最初、地味だと思っただらびびるくらいイケメン

だったっていう」

「私が最初にイケメンだと気づきました」

「生産者の声みたいに言うな」

軽口を言い合いながら笑いあう。こうして世間話をしたのは久しぶりだ。元の隣にはいつも現彼女がいて、私はサークルの業務連絡を聞くだけで彼女に睨まれていた。

だけど今の彼女は、ユウマ君がお気に入りの方だった。

今まで何をするにもどこへ行くにも元彼にべったりだったのが、今度は同期の女友達を連れてユウマ君のところへ頻繁に行くようになった。

サークルの中では私を含めて、彼女のそのあからさまな姿に呆れる人が何人かいたけど、余計な波風は立てたくないからか、指摘する人はいなかった。そうして根も葉もない噂ばかりが流れていく。

「別れたわけではないんだよね？」

「誰が？ 俺らが？ 別れてねえよ」

元彼が半笑いのまま早口で否定した。噂が耳に入っているのか、それとも本気で心外だったのか、否定しておいてみるうちに真顔になっていく。

あ、まずいことを言ったかも……。

「じゃあ、また後で」

「ん、おう」

すぐに謝りその場から離れて何の気なしに振り向くと、元彼が小走りで座敷までの角を曲がっていくところだった。

面倒なことにならなきゃいいと思いつつながら、修羅場になってしまえとも思う。

余計なことを言ったのは自分なのに、そんなことを考えながらトイレの個室で時間をつぶした。

だってあの子が悪い。彼氏がいるくせに他の男の人にちょっかい出してき

て。言い訳ができるように複数で近づくなんて、よっぼどたちが悪い。嫌い。本当に大嫌い。

しばらくすると同じサークルとおぼしき後輩集団が入ってきて、個室に私がいることも知らずに大声で話し出した。

元彼が座敷に戻ってからやっぱりなにかあったのか、「すごかったね〜」と口々に言う。

「部長、あれ絶対怒ってたよね」

「てか、ビッチの自業自得じゃん？ 同じサークルに彼氏いるのに他の男にべたべたしてさ、男漁りに来てんのかよって」

「えー、最初からそうじゃん、あいつは。先輩もかわいそうだよね、悪者にされて」

部長というのは元彼のこと、 「ビッチ」というのは彼女のことなんだろう

う。そして「かわいいそうな先輩」というのは、……私のことか。

メイクでも直しているのか、カチャカチャとプラスチックのぶつかる音がトイレに響く。

元彼とその彼女の話題はすぐに尽きて、その代わり、後輩たちによる「かわいいそうな先輩」の話はまだ続いた。

「周り巻き込んですごい振られ方したのに、よく元彼と同じサークルにいられるよね」

「私だったら無理なんだけど」

「部長のこと、まだ好きなんじゃない？」

甲高い笑い声が二重三重に重なった。蓋を閉めたままの便座に座りながら、「もう好きじゃないし」と心の中で毒づく。

完全に出るタイミングを逃した。

ここで行けば、さらにサークル内が気まぜくなるのはわかっている。だ

から私は飲み過ぎて具合の悪くなった人のフリをしながら、彼女たちが出て行くまで個室を占領した。

飲み会が終わっても、二次会へ行こうとしているメンバーが次の場所をどこにするのか決めかねていて、店の前でたむろしている。

まっすぐ家に帰る私は誰に言うでもなく「お疲れ様でした」とだけ伝えて、その合間をすり抜けた。

今日は、なんだかやけに疲れたな……。

後輩たちの、聞きたくもない本音を聞いてしまったからだろう。

やっぱり元彼と別れるタイミングでサークルも辞めるべきだった。

特に仲のいい人なんていないのに、どうして居座ってるんだっけ。……

ああ、寂しいからか。

一人で歩きながらぼんやり考えていると、いつそう気分が暗くなる。

盗み聞きしてしまったとはいえ、本心が詰まっている彼女たちの会話はかなり堪えた。

「先輩っ」

繁華街を抜けて、とぼとぼと大学近くの街灯の下を歩いていると後ろから大きめの声で呼ばれた。それと同時に強い力で腕を引っ張られる。

「部屋に行くって言ったのに、なんで先に帰るんですか」

ユウマくんだ。

走ってきたのか、少し息が上がっている。

「……あー、囲まれてたから二次会行くんだと思ってた」

「行かないって。囲まれてるの見たなら助けてよ」

「ごめん」と言っただけで笑ってみせる。むうっとしかめっ面をしている彼は、駄々っ子のように私の腕をずつつかんだまま離してくれない。やっぱりお酒を飲んだのか、性格が少し幼くなったように感じる。いつもの彼はこんなに感

情を出さない。普段からこれくらい素直でわかりやすかったらいいのに。

「……一緒に帰ろっか」

「うん」

つかまれた腕がほどかれて、ユウマ君の長い指先が今度は私の手を握る。突然のことで思わず顔を見上げると、目が合った。

「なに？」

「ううん、なにも……」

一回一回、ドキドキしているのは私だけか。

歩幅の大きい彼に合わせて急ぎ足で歩いているうちに、話題は自然と今日の飲み会のことになった。

「人付き合いが苦手だって言ってたのに、みんなと仲良くできてるね」と私が言うと、彼は「おもちやみたいに扱われてるだけだよ」と興味なさそうにする。

「でも最後の最後まで、女の子に囲まれてたし」

「俺、ああいう高い声の女の子たち嫌い」

すつともう一段階、声のトーンが落ちた。

囲んでいた女の子の中には、当然のように元彼の現彼女が含まれている。

サークルの中で唯一、私の嫌いな人。自分がいつも輪の中心にいないと気が済まない人。

彼も私と同じように、そういうタイプは嫌いだと聞いてほっとした。……性格が悪いのは自覚している。薄ら暗い気持ちを押し隠しながら、平然を装って訊ねてみる。

「へえ、なんで？」

「小、中って、あんな感じのうるさい女にずっとつきまとれてからかわれてたから、トラウマ」

聞けば、そういう女の子に、ことあるごとに馬鹿にされてきたらしい。

視力が低くて小学校低学年から眼鏡だったこと、クラスの女子よりも背が小さかったこと、足が遅かったこと、小食だったこと、本ばかり読んでいて、いじめてくる女の子より成績がよかったこと。それらが原因で目をつけられていたという。

「もしかしてその子、ユウマくんのこと好きだったんじゃない？」

なんとなく察して聞いてみると、「え？」と彼が目を見開いた。

「なんでわかんのか？ 中学の卒業式の日にずっと好きだったとか言われたんだけど」

「ほら、好きな子をからかうって小さい子にありがちでしょ。気を引くために」

さすがにそこまで好きな子の全人格を否定するほどではないけど、私にもなんとなく身に覚えがある。

ちよっとしたことだからかったり、話しかけにいたり、目で追ったりし

た。

「いや、からかうっていうか、人格否定され続けてたんだけど」

「あー……なんていうんだっけ、試し行動みたいな感じ？ こっちを向いてくれるなら好意でも敵意でもなんでも良いんだよ」

「……ふーん、気持ち悪」

昔を思い出したからなのか、それともそういう女の人全体的ことを指しているのか、ユウマくんが眉をひそめて忌々しそうに彼が吐き捨てた。

自分の小学校時代のエピソードをひけらかさなくてよかった。あやうく嫌われるところだったと、心の中で胸をなで下ろす。

でも、そうか。ユウマくんはきゃーきゃーはしゃぐような女の子は嫌いなんだ。……覚えておこう。

「そういえば、先輩はそういうことしないね」

「え？」

「俺にまわりついてきたり、無駄に話しかけてきたり」

「ああ。でも最初はかなりうざ絡みしたと思うんだけど」

「最初だけね。あとは全然じゃん。飲み会でも話しかけてくれないし」

「ん、そうかな」

久しぶりに人を好きになったから、一から情報収集するのが下手になっている。

私が聞かなきやユウマくんは滅多に答えてくれないし、毎週ないがしろにされている他の女の子達を見ているから、どこまで踏み込んで聞いていいのかわからない。うざいって思われたくない。

昔は、それこそ高校生くらいまでは、自分も周りもわかりやすく、もっとうまく好意を出せていた気がする。

今は「彼が離れていかないように」「嫌われないように」というのが一番優先順位が高くて、自分の気持ちはその次だ。元彼に二股をかけられて振られて

から、恋愛が難しく感じる。好意が報われないなら、いつそ気づかれないほうがいい。

部屋の鍵を開けると、家主より先に彼が入っていった。慣れたように素早くベッドに寝転がって、バッグを片付けている私を呼ぶ。

初めて寝たあの日から毎週金曜日にあるサークルの飲み会后、彼は決まって私の部屋に来るようになった。

そして生理のとき以外、毎回セックスをする。

二度目と三度目は私のほうから誘った。

だけど付き合っているわけではない。そういう言葉は、お互いに一度も言ったことがない。だって言ったらきつと、彼はここに来なくなってしまう。

「なんか飲む？」

「いらない、早くこっち来てよ」

体を起こしたユウマくんが、ぼすぼすとベッドの端を叩く。

呼ばれると、毎回、緊張する。

最初は私の方が誘っていたはずなのに。

おずおずと彼の隣に腰を下ろすと、髪に手を差し入れられた。ぞく、と背筋に電流が走って体全体が震える。機嫌がいいときにする癖だ。女の子が人形の髪をとかすみたいに、彼も隣に座る私の髪をよく撫でた。

「っ、ユウマ君、今日飲んだ？」

「ブルーベリーみたいな味がする甘い液体なら飲んだ」

「え、どれくらい？」

「覚えてない」

淡々と言葉を返してくる彼にじっと見つめられると、緊張して視線が泳いでしまう。髪を撫でる手が止まって、頬に触れた。顔が近づいてくる。触れそうになる寸前で唇を避けた。

「……キスは、しなくていいよ。私、かなりお酒飲んだから」

付き合っていないから、キスだけはしない。セフレになるときにそう決めた。振られるのが怖くて彼女になれなかった私の意地だ。

「じゃあこっち」

「ん……っ」

あっさりとは離れた唇が、私の耳に触れた。くすぐったさに声を漏らすと、今度は彼の舌が耳のふちをなぞる。水音が鼓膜に直接入ってきて、体がより一層ぞくぞくと震える。

「なんか元気ない？」

いつもより大人しくしていたからか、首すじに吸い付いていた彼が顔を覗き込んできた。

「そ、そうかな、……たぶん眠いんだと思う」

「起きて、ちゃんと相手してよ」

「ごめんごめん」

ヘラヘラと笑ってやり過ぎす。下手くそな嘘はバレていないみたいだ。

もう少し、お酒を飲んだらよかった。前後不覚になるくらいべろべろに酔っ払っていたら、後輩たちの言葉もきつと笑って流せていた。「おもちゃみたいに扱われているだけ」というユウマくんの言葉が、なぜか急にフラッシュユバツクしてきた。

今の状況も、そうなのかもしれない。最初は珍しくても、そのうち飽きられてしまうのは嫌だ。

「ほら、バンザイして」

私のそういう面倒くさい気持ちには気づかず、カットソーの裾を持ち上げられる。言われるがままに腕を上げて、首から服が一枚取り払われていく。白いキャミソールが丸見えになって、ベッドの上に押し倒された。

「あ、電気」

「わかってるよ」

ユウマくんが慣れた手つきで、サイドボードにあるリモコンを引き寄せて部屋の明かりを消した。リモコンと一緒に眼鏡もサイドボードに置かれる。暗闇の中で聞こえる衣擦れの音が、ベッド横の床に落ちた。

「……後ろ向いて」

ユウマくんの言う通り、背中を向ける。キャミソールの裾から指が侵入してきて、ブラジャーのホックを外した。二枚とも一緒に腕からするりと抜けて下もすべてさらけ出されて、まっさらになる。

裸の状態で視界も心許なくて、喉がこくりと鳴る。体の上にまたがった彼の大きな手が、私の頬を包んだ。そっと手を重ねると、ふ、と小さな笑い声が空気に漂った。

「まだ眠い？」

「ううん」

「ん」

すりすりと頬を撫でる手がだんだんと下に下がっていった。胸の膨らみをすくい上げて揉みしだいて、親指の先が胸の頂点を撫でる。

「んっ」

指先だけでくるくると弄ばれると、鼻から抜けるような声が漏れた。無音の空間だから声が響くのは嫌で、とっさに手で抑えて唇を噛む。

少しずつむくむくとそそり立ち硬くなっていく乳首が、急に強い力で摘みあげられて上下に揺すぶられた。痛みに近い刺激にびくんと腰が跳ねて、下半身がわななく。

「——ああっ」

唐突にぢゆう、っと音を立てて、指で触っていない方の胸の先端が吸われた。

唇はそのまま離れず、ねろねろと口の中で乳首を転がされる。快樂神経に繋

がったそこは、刺激をうけるたびに下腹部の疼きに変換されていく。

「んっ、……ふ、う……」

甘噛みを繰り返された先端がむず痒い。目尻が熱くなつて呼吸が震えて荒くなる。太ももを擦り合わせて下腹部の疼きを逃がすけど、余計に触って欲しくなつて意味を為さない。

「は……、はぁっ、ぁっ、……んんっ」

何度も音を立てて吸いつかれた乳首がじんじんと熱く痺れてくる。我慢して結んでいた唇もいつの間にかぼっかり空いて、荒い呼吸と我慢できなかった嬌声が漏れる。

「あ、もうっ……」

「なに？」

「下、も、触ってほしい」

「ん」

胸を揉んでいた手が下腹部に伸びる。子宮の辺りを手のひらでゆっくりと撫でられて、触られていない蜜口の方がひくひくと震える。

「はあっ、ん、んっ」

まだ焦らされている。

下腹部をすりすりとお撫でられたまま、乳首を唇でむにむにと挟まれる感覚に、熱くて重苦しい息が漏れる。

蜜を溜め込んだお腹の奥がうずうずする。

触られていない腔内に力が入ると、とろ……と愛液がお尻の方まで垂れていく心配がした。

「はあっ……は、ああっ」

下腹部に置かれた手のひらが、体の外側からぐうつと子宮を押した。ひくんと腰が跳ねる。

その後も何度か撫でられたり押されたりを繰り返されて、太ももがぶるぶる

と震える。

ちゅうつと胸の先端をきつく吸われて、体をくねらせた瞬間。

「ん、やあつ、ああ……っ」

——なに、今の……。

体に電流が走ったのかと思った。目の前がチカチカと明滅して、一瞬、なにが起きたのか分からなかった。

腕を伸ばして彼の頭を抱き抱える。

「——はっ、はっ、……はあつ、あつ」

細切れの息を吐くと、絶頂したときみたいに、意思を無視して子宮がきゅうきゅうとうねっているのがわかる。

「あ、待、っ……」

体が落ち着かないうちに下腹部を触っていた手が、トロトロに濡れそぼった入り口へ指を突き立てた。人差し指と中指がくちゅ、と音を立てて、肉ひだを

搔き分けながらゆっくりと奥に入り込んでくる。

「んんんっ」

ずっと待っていたものだったから、体がゾワゾワして無意識のうちに背中が
反り返る。

「もしかしてイッた？ 膣内、びくびくしてる」

「んう、あ……わ、わかんない……」

「ふうん」

お腹側へ折り曲げた指が、くちゅ、くちゅ、と膣内の浅いところを擦る。脳
天を駆け抜けるゾワゾワが止まらない。彼の頭を抱いていた腕はわなわなと
シートをつかんで、顔を背けて唇を噛む。

「んんっ、……ふ、ううっ」

くちゅと入り口辺りを擦っていた指は、私が体をくねらせるとわざと動き
を止めて、反応を楽しんでいるようだった。

イキたいのにイケない、生殺しの状態が続いて、腰がガクガクと振れる。

「——あ、あ、もう、や、だあ……っ」

もどかしい状態が長くて、ついに我慢できなくなる。

半泣きになって訴えると、それまでゆっくりだった指の動きがどんどん早くなつた。

指を根元まで突き入れて、深いところまでぐちゅぐちゅと掻き回される。

ごりごりと膣内をえぐっていく感覚に震えが止まらない。身体中の力が抜けて、子宮の奥からどんだん愛液を溢れさせていく。

「あっ、あっ、……はげし、…の、だめ、えっ」

指が奥深くまで入って、子宮口の近くをにゅちにゅちと撫でる。

「やああっ、やあああ……っ」

膣奥のくぼみを二本の指で撫でながら、親指の腹が包皮を被ったままのクリトリスをぐりぐりと強く押し潰した。

パチンと殴られるような強い衝撃に目眩を起こす。

イキたいて切望していたのは本ただけど、こんな立続けに責められるとおかしくなる。

「や、あつ、ぐりぐりやああつ、……イツちゃうつ、いく、い……つ」

叫ぶように訴えても、指の強さと動きは変わらない。どうしようもなく腰をバウンドさせて逃げようとする。

本当にイキそうになって、息が一瞬止まって喉を仰け反らせると、ユウマくんが体を起こして私の足の間へ頭を寄せてきた。

「——や、」

首だけ起こして見ると、赤黒い舌先が伸びているのが見えた。——だめ、

「だめ、だめえっ」

——ぢゅうううううっ

制止の声は届かず、舌は生き物のようにクリトリスを這うと、包皮ごとその

「まま唇に含んで吸い上げた。強い刺激に目の焦点が合わなくなつて、腰がこれ以上にないくらいしなる。」

「あ、はあっ、——あああ……っ」

肉壁をえぐる指はぐねぐねと動き回つたまま、吸い上げられたクリトリスは唇で固定されながら舌先でびちびちと弾かれる。

「あ、ああ……っ、イツてる、っ、これ、も、おお……っ」

掠れた呼吸混じりの喘ぎ声をまき散らすのに、止まらない。舌で無理やり包皮をめくられて、あらわになつた肉粒がちゅぽちゅぽと音を鳴らして直接吸いつかれる。

「っ、んんあ——っ」

指が抜かれて、引くつく腰を両手で押さえつけられた。下からねっとり舐めあげられて、ゾワゾワとした寒気が脳天まで這い上がる。舌先で尿道をほじくられたかと思えば、蜜壺の入り口にずっぷりと舌が埋め込まれて、ナカでぐ

にぐにと蠢いている。

「あ、あぁっ、やぁあー……」

溢れ出る愛液を啜って、もつと出せと催促するように舌がじゅぶじゅぶと音を出しながら抜き差しを繰り返した。

セックスの経験もそんなにない状態で粘膜を舐めるなんて行為、初めは抵抗があるものだと思っていたのに、ユウマくんは平気でこういうことをする。

「う、はぁ、っ、あー……、も、やめ、え……」

「ん、……やだ」

私の足の間に突っ込んでいる頭を押しても、再度埋め込まれた舌はビクともしない。

粘膜特有の生暖かさと、指ともペニスとも違う軟体動物のような柔らかな圧迫感はそんなに強くはない。けれど確実に弱いところを突いてきて、私は何度も何度も下腹部を震わせて甘イキを繰り返した。

深くイケないまま気が狂いそうになるくらい責められて、体はもう力が入らない。呼吸をするために、ぽっかりと開けた口の端からは涎がこぼれて、息を吐く度に、じゅわつと股ぐらが熱くなる。

「あ……あぁっ……」

両手足を投げ出して私があまり反応しなくなったからか、肉ひだを貪っていた舌がようやく離れた。

奥からせき止められていた粘液がこぷりと吐き出されて、お尻の方まで伝い垂れていく。その感覚に身震いする。

「挿れていい？」

顔を上げたユウマくと目が合う。ぼやけた頭は反応が鈍く、頷く前に膝の裏側に手を入れて入れられて両足を開かされた。

愛液を塗り付けるように入り口をねちねちと亀頭でなぶられて、ゆっくりと腰が沈んでいく。散々指と舌でほぐされたはずなのに、みちみちと無理やり内

臓を押し上げられていく感覚が、頭の中を占領していく。

「ふ、つくう、……は、あ——っ」

「うわ、あっつ……」

私の頭の下に手を差し入れて、体を密着させた彼が低く唸った。

すぐに、ずるる、とペニスが引き抜かれて、最奥まで一気に突かれる。

「——あああっ」

叫んでも、腰の動きは止まることなく一定のスピードで膣内を削られていく。

「あっ、あっ、ああっ、……あ、んうっ」

「ん、せんばい、」

やっと一番奥の気持ちいいところを責められて嬉しいはずなのに、これ以上激しくイクのが怖い。呼吸がままならなくなってもう長い時間経つ気がする。

毎回、気を失う限界までイカされて、溺れるなどという方が無理だ。

「せんばい、腕回して」

「あ、おもしろいから……」

「重いのがいいんだって」

だるくて上がらない腕をゆっくり伸ばすと、二の腕を掴まれてぐいと引張られた。膣内のものが抜けないように腰を持ち上げられて、視界がぐるりと回る。

胡座をかいたユウマくんの上に乗るような体勢になる。体重をかけないようにシーツの上を突っ張っていた足は、腰をつかんで押しつける彼の腕の力で簡単にはずれて、剛直なペニスが根元まで深く入り込む。

「……ううっ」

子宮の、一番奥のかたちが無理やり変わる衝撃に、息を吞んで体を震わせる。思わず首に回った腕に力がこもって、しがみつくような姿勢になった。汗でじっとりとしたお互いの体が再度密着して、甘い香りのする熱がぶわりと

顔にまとわりつく。

いつもなら体位を変えてもすぐにながつと腰をぶつけてくるのに、なかなか動かない。何度もイッた余韻が落ち着くまでずっと私を膝の上に乗せたまま、体を密着させて髪を撫でられる。

「……どうしたの？」

問いかけても返事は返ってこない。ただずっと手が動いているだけ。今まで性感帯を探って遊ぶようなセックスで、乱暴ではなかったけど優しくもない行為だけのものだったのに今日はどうしたんだろう。こんな彼女にするようなこと……。

恥ずかしくて俯いていた顔を上げて、ユウマくんの顔をのぞき見る。暗い部屋の中であごの輪郭がぼんやりと浮かぶくらいで、表情はよく見えない。ふいに彼の顔がこちらを向いた。前髪を持ち上げられて、丸見えになった額に唇が触れる。びっくりして声を出せないでいると、唇はそのまま頬や耳を滑ってい

く。

「や、ふふっ、くすぐったいよ」

ちゅ、ちゅ、とついばむような唇が本当にくすぐったくて、くっついてる状況を忘れて笑ってしまった。こんなに戯れてくるなんて珍しい。というか初めてかもしれない。

少しくらいなら私もくっついていいかな。ワガママな気持ちが出てきて、彼の唇が離れた瞬間、甘えるように腕を伸ばして擦り寄ってみた。

拒絶はされず、甘やかすみたいにぼんぼんと頭を撫でられる。

「……なんか今日、優しいね」

「そう？ いつも優しくしてるつもりだけど」

「いつもより優しい」

私がそう言うと頭を撫でていた手が腰のくびれを通り過ぎて、お尻を鷲掴みにした。ひくん、と膣内の肉ひだが引き攣る。

ユウマくんが動きやすいように、腕の力を緩めて肩をつかんだ。ゆったりとお尻を揺さぶられる動きに落ち着いていた熱が再燃する。

「……んっ、う、……はあ、……は、あっ、ああっ、……っ」

「せんばい、奥ぐりぐりされんの好きだよね」

身動きの取れなくなつた子宮の奥を、硬い先端で舐めるようにぬちぬちと音を立てながら押し付けて擦られて、数センチだけ引き抜いては叩かれるという動きを何度も繰り返された。

「ああっ、これ、やあ……っ」

「これ？」

「ん、うう、……あんっ」

ぐりぐりと子宮口をしつこく舐めまわされている感覚に、結合部からねつとりとした音を垂れ流しながら、蕩けた声が漏れる。言われてから初めて、膣内をなぶられるのが好きなんだと気づく。

ユウマくと関係を持つ以前は、こんなに時間をかけてセックスをするなんてなかった。中イキも一回のセックスで何度もできるようになって、どんどん開発されていく感じがする。

「あ、もう……っ」

「またイクの？ 早くない？」

「だって、さっきから、——あッ」

びくんつと腰が跳ねる。腰が引けそうになるのをぐつと引き戻されて、張り出した亀頭が一番敏感なところをぞりぞりと擦りあげる。動き自体はそれほど激しくない。ゆっくりと腰を揺らしながら子宮口からトプトプと溢れる愛液をまとわせて、充血した肉壁に塗りたいくらい。

十分にほぐれている腔内をもっとほぐすように、時間をかけてグズグズに溶かされていく。

「はあっ、は、——っ」

ぶるりと背筋を震わせると、無意識にきゅうつと腔内が収縮した。さつきからゆったりとした優しい波が来るばかりで、気持ちいいけどお腹の奥が切ない。

もっと頭が真っ白になるくらい深くイキたい。

肩を掴んでいた腕をもう一度首に回して、彼の首すじに唇を寄せる。舌先でなぞってからかるく歯を立てた。

「痛い。なに、なんか怒ってんの？」

「……おこっ、てない……」

「言わなきゃわかんないじゃん」

「……つよく、して、ほしい」

「なんで？」

「……イキたい、さつきから、ゆっくりしてばっかで、おなか苦しいの」

鼻で笑われて、恥ずかしいことを言っていると自覚して泣きそうになる。

「さつきはあんなに泣いてやめてって言ってたのにねえ」

ずんつ、と下から強く突き上げられる。一瞬、息が止まって、遅れて肺に溜まった空気が押し出されるように漏れ出た。そのまま尻を驚掴みにされて、上下に強く揺すぶられる。グチュグチュといやらしい音を部屋中に飛び散らせながら、子宮口の形が変わるくらい硬い亀頭を強く押し付けられる。

「うあつ、やつ……、おくつ、おく、いッ……、んつ、んーつ、……い、つく」
ブルブルと全身が震えて、じわあつと下半身から力が抜けていく。頭の中が白くモヤがかって、下腹部がきゅんきゅんと痙攣し始める。

「あ、あ——……っ……」

「これ何回目？ 早いって」

ぺちんつと音を立ててお尻を叩かれる。

「ひゃうっ」

息を呑んで背中をそらすと声をあげて笑われた。恥ずかしくて顔から熱が吹

き出す。

「せんばい、ほら、へばってないでちゃんと腰振って」

「ふ、ううッ、んっ、あ——」

ベッドに寝そべったユウマくんの上にまたがったまま、動けないでいる私の尻がぺちぺちと叩かれて揺すぶられる。

何度もイかせてもらったから、ちゃんと気持ちよくしなきゃいけないのに体に力が入らない。

「ほら、体起こして、動け」

命令するような口ぶりの彼が両ひざを立てて、下から突き上げる。ぐぢゅっぐぢゅっ、と空気を含んだ水音を響かせながらペニスが膣壁をえぐっていつて、惚けたままの私を容赦なく叩き起こす。

それでも、体は指先まで痺れて力が入らないから、思のように動けない。ユウマくんの体の上で潰れたカエルみたいな姿勢で情けなく喘ぐだけだった。

「あ、ああっ」

指が、またお尻の膨らみをつかんだ。左右に割り広げられるように乱暴に揺すぶって、腰が打ち付けられる。肉壁をえぐられながら子宮の奥をどちゅどちゅと叩かれて、また頭の中が真っ白になる。

「は、ああっ、ん、くううっ」

何度も奥を突かれて、私がイキそうになって下腹部を締めると腰の動きがピタッと止んだ。

時間を置いて体の震えが収まると、またゆっくりと膣内をこねられて、少しでもキツく膣内を締めてしまうとまた動かなくなってしまう。

頭の中の酸素が薄くなって、視界がチカチカする。

「うう、んあ、あ………っ」

さっきよりも長い時間焦らされて、反応が鈍くなったせいか、突き上げる動きが止まって今度はお尻を優しく撫でられた。

スリスリと手のひら全体が動き回って、くすぐったさに身をよじる。ふいに指先がお尻の割れ目をすうつと撫でて、私は息を飲んだ。

「あ、はあつ、はあ……つ、——!？」

まさか、と不安に喉を鳴らすと割れ目を下から上へくすぐっていた指が、割れ目を押し広げて中へ潜り込んできた。

誰にも触られたことの無いその場所は、膣口から溢れ出た蜜でトロトロに濡れそぼっている。何をするのか予測して、背筋が強ばる。

ダメ、そんなところ撫でないで……つ

「んあ、は、はあつ、——ああつ」

言いたくても、からからに渴いた喉からは掠れた喘ぎ声しか出ない。

指が、ぬるぬると滑る穴のシワを一本一本撫でるように這い回る。むずがゆいような奇妙な感覚に体が震える。

「ん、せんぱい、キツく締めないでイキそうになる」

そんなつもりは無いのに、ユウマくんは眉根を寄せて苦しそうな息を吐いた。

彼の体の上で身動きが取れずに、両足を開いてペニスを啜えこんだまま、お尻の穴を撫でられているという恥辱に頭がおかしくなりそうだった。

撫でられる度に抵抗しようともがけば、肉ひだが擦れて、ぞくぞくと背中が痺れて腔内がきゅつきゅつと締まる。

唐突に、撫でていた指がつぶ、と奥に入り込もうとしてきた。

「んう、んん——っ」

くぐもった声をあげながら抵抗する。

だけどもまた、体の下から叱るように激しく腰を打ち付けられて、あっけなく力が抜けていく。

脱力して抵抗しなくなつたのを見ると、止まっていた指がまた動き出した。

「は、すげえイキまくってんのにいつもより奥キッツ……。せんぱい、これ好

き？ めちやくちや締めてくるよ。自分でもわかんない？」

「う、んん、ちが……っ……わかんない……」

いやいやと首を振る。好きじゃない。知らない。そんなところ、触られたこともない。

ぬりゆぬりゆと二本の指でお尻の穴を撫でられて、広げられる。抵抗して力を入れてすぼめると腔内に挿入していたものの感触がぐつと際立った。

「っ、あ、あっ」

「あー……待って、やばいイキそ……っ」

眉間に皺を寄せて、ぶちゆぶちゆと粘液の飛び散る音を出しながら、めちやくちやに腰が打ち付けられていく。穴を撫でられて、つぼつぼと指先でほじくられて、脱力し切った腔内をごりごりと貫くペニスの乱暴さに抗えない。

「もっ、やえ、……っ、イクっ、イク……うっ」

「——イけ、イッちやえ」

「んうう~~~~~っ」

膣内がぎゅううううつと深く締めた後、きゅつきゅつ、と細かな痙攣を繰り返す。

「はあ、あ、……あー、でる……っ」

苦しそうな声で呻くと、お尻に食い込む指に力がこもった。ビリッとした痛みが歪む。膣内で膨らんだペニスの先端が、子宮口にみっちり押し付けられる。ビクビクとのたうつような蠢動が、薄いゴム一枚隔てて伝わってくる。

「……うーわ、すげえ出た」

長い射精が終わって、息を切らした彼が私の体の下で笑った。

後始末をするのに邪魔になると思っ、体を起こそうと身をよじる。するとお尻をつかんでいた手が腰に回って私の動きを止めた。

「ああ、待って、まだイッたばかりだから、あんま動かないで抱きしめられるような体勢になって、顔が勝手に熱くなる。

「……心臓の音、すごいね」

「んー？ セックスって全力で走るくらいしんどいらしいよ」

「しんどかったの？」

「いや、めっちゃくちや気持ちよかった」

意外にも素直に認めてきたから驚いた。まだ酔っ払ってるんじゃないのとからかう。

「一番最初にしてからずっと気持ちよくて、もう先輩としかできない体になってる」

「そうなの？」

冗談だと思って笑いながら、本当にそうならどんなに嬉しいかと胸の中で思う。このまま私しか知らないままで、私だけ見ていてくれたらいいのに。

「……ねえ、先輩って、部長と付き合ってたの？」

ようやく体を離して後始末をして、だけどシャワーを浴びる気力もないまま並んで裸でまどろんでいると、唐突に訊ねられた。

「え？」

「さっき、飲み会でちらっと聞いた」

やっぱりあのとき、なにかあったんだろう。

飲み会で他の男にちょっかいをかけているあの子と、元彼が陰悪な雰囲気になるのはわかるけど、一体どのタイミングで私の話題が出たのか。

「あ、うん……少しの間ね。今はべつに、向こうも彼女いるし」

「ああ、あの一番うるさい人でしょ。先輩と全然タイプ違うね」

「……うん」

別れた直後から何度も人づてに届いた「全然タイプが違う」という言葉を、彼にも言われて落胆する。

やっぱりみんな、そう思うんだ。

元彼も、私みたいに言いたいことを素直に言えない女より、あの子みたいに喜怒哀楽がはっきりしている方が可愛いと思っただから浮気なんてしたんだろう。

実際、性格はどうであれ、あの子の周りには人がたくさんいる。私とは正反対だ。嫌いだけど、誰とでも馴染めるそういう底なしの明るさは羨ましいと思う。

「先輩はさあ、」

「……ん？」

「あれ、なに言おうとしたんだっけ。……眠くて飛んだ」

「えー、なにそれ。おやすみ」

「んー」

ユウマくんは低く唸ると、私から奪った枕の下に両手を入れて、うつ伏せになつた。

その黒髪の後頭部を見ながら、どうしても考えてしまう。

もしかしたらユウマくんも元彼と同じように、私に飽きたらあの子のところへ行ってしまふんだらうか。

振られたときのことを思い出したら、目が冴えてしまった。彼を起こさないようにベッドから抜け出て浴室へ向かう。

シャワーを浴びながら、毎回思う。

明日は、何時に帰っちゃうんだらう。いっぱい抱き合つたのに、終わった後はいつも寂しくなる。